「標準」の漢字運用能力の習得を目指す学習指導法の工夫について

―― 国語、漢和辞典の活用と自作漢字テストの作成、実施 ――

前在コロンビア日本国大使館附属日本人学校　教諭
茨城県常総市立水海道西中学校　教諭　吉　原　秀　明

キーワード：言語理解、理解語彙、漢字運用能力

１．はじめに

在外教育施設における国語科の授業は、日本国内の学校と同様のレベルで行われることが望まれる。一方で、近年では在外教育施設に通う児童生徒も多様化し、必ずしも全員が当該学年の国語科教育に合致するレベルの日本語運用能力を有しているわけではない。特に、漢字の習得レベルについては課題を抱える学習者が多く、漢字能力検定の実施や、漢字学習教室の開催を行っている在外教育施設も多いと聞く。

私が勤務したボゴタ日本人学校にもコロンビアで生まれ育った学習者が在籍し、当該学年における国語科の学習レベルと、有している日本語運用能力との間に生じている大きな差異に苦しむ生徒がいた。より具体的に述べれば、漢字の習得レベルは中学校１年生ながら小学校の低学年レベルで止まっている状況にあった。今回、この学習者を対象とした平成27年度の授業実践と、その実践を通して明らかにされた成果と課題を報告する。本報告が、在外教育施設における漢字の学習指導法の一案となれば幸いである。

２．学習者の実態と授業実践の構想

(1) 学習者の実態について

小学校卒業程度の日本語力を測定する日本語検定５級の問題において総合の正答率は26.4%と合格にはほど遠い数値を示していた。特に、語彙や語意の正答率が23.5%（８問／34問）、漢字と表記の正答率が20.0%（４問／20問）と、この２分野において正答率が非常に低い。このことは、言語理解の観点から見て非常に大きく、かつ喫緊の改善課題であった。なぜならば、この分野の正答率が低いことは言語理解の前提が崩れていることを意味するからである。実際に上記の通り、本報告の対象学習者が年度当初に有していた漢字力は、小学校低学年のレベルであった。具体的には、小学校３年生向けの漢字テストの総合正答率が25.8%（97問／376問）、小学校２年生向けのものでも49.3%（140問／284問）という数値であり、これは日本語を理解しているというには程遠い数値である。

しかし、漢字そのものの形が崩れているという間違いは、ほとんど見受けられなかった。それを証明するように、一文字だけを書く問題（数字や曜日）については正答率が高く、単語を書く問題の正答率が低くなっていた。このことから筆者は、問題とされている単語そのものを理解語彙として獲得できていないことが学習上の根本的な課題であると捉えた。したがって漢字そのものの学習に加え、その漢字を用いた組み合わせの数、すなわち語彙数を増加させるよう手立てを講じることが、学習者の持つ学習上の課題を解決するために必要不可欠であると考えた。

(2) 授業実践の構想について

(1) で述べた実態把握を通して、『中学校学習指導要領』第２章第１節国語の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕第１学年 (1) ウ（イ）に示された指導事項に関わり、小学校で履修済みの事項について再確認することをねらいとする特設単元を構想した。ここで述べた履修済みの事項とは、具体的には、学年別漢字配当表の漢字のうち900字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うことを指している。併せて、ここに示した900字程度の漢字については特に明示されるものではなく、既習事項の中から「日常生活や各教科等の学習の中で多く使われる漢字などに配慮して指導すべき字種を決める」ものであると『中学校学習指導要領解説国語編』では

説明されている。そこでこれらの記述に合致する漢字運用能力を「標準」と規定し、その習得を目指す授業実践を構想した。

授業実践にあたっては、日常生活の中で耳にすることが多い単語を漢字を用いて書き、文の中で使用していくことによって、漢字の使い分けに習熟することに主眼を置いた。また、学習指導を進めるにあたっては、「標準」の漢字に習熟すること、その漢字を用いた理解語彙数を増加させることという目標の達成を目指して、次のような工夫を行った。

・「知っている」ことを活用し、「できる」ことが実感できる授業展開
・新たな語彙を獲得させるための、国語辞典と漢和辞典の積極的な活用
・漢字の使い分けに習熟させるための、学習方法の確立

1 点目は本実践の学習者に対する個別の具体的方策として提示したものである。対象となる学習者は漢字の学習に対して強い苦手意識をもっており、ともすると学習が消極的になるおそれがある。それを防ぐためにも、すでに「知っている」文字を活用することが学習抵抗を軽減する上で重要であろう。また、「知っている」文字を活用することで、新たな理解語彙を獲得しやすくなるという効果も同時に期待できる。

2、3 点目は本実践の目標に関わる手立てである。語彙を正しく表記するためには反復練習も必要である。またその語彙がどのような意味を表すかは、文中で使われないと捉えにくいものである。これらのことに鑑み、辞典を活用し、1 つの漢字からできるだけ多くの単語を列挙させ、それを用いた例文の作成に継続的に取り組ませるように配慮した。併せて、学習者自身が達成度を測るための定着度テストを作成するようにも指導を進めた。これは学習者自身がテストを作成し、実施することによって、その経験が学習者の内省を生み、定着度も増すと考えるためである。

以上 3 点の学習指導法の工夫を用いて、実際に授業実践を行った。その実践結果とその後の取り組みの経過については次章で触れる。

３．授業実践と継続的な取組

(1) 授業実践の結果

第 2 章で示した 3 点の学習指導法の工夫を活用し、6 月に授業実践を行った。その概要と結果について、簡潔に報告する。

まず第一の成果として、学習目標を学習者自身が理解し、学習の視点がぶれることなく授業を展開でき、学習者の内面に自信が生じたことが挙げられる。学習者自身は授業を通して、思ったよりも「できる」という自覚が生まれ、授業終了後に、「できた」という達成感が生まれていた。

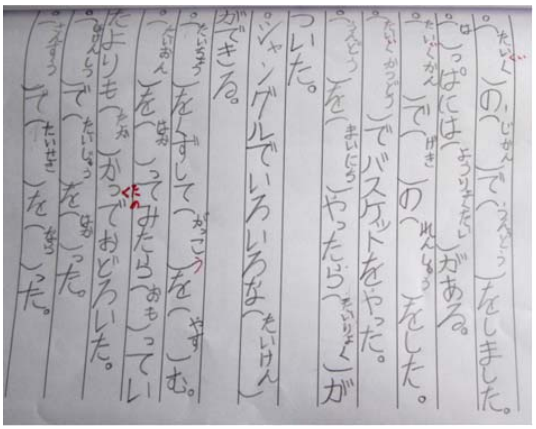
また、付箋を用いて漢字を数多く掲示したことも、学習者の中での自信を高める材料ができた。学習者自身が自力で挙げることのできた漢字は 193 字であり、背面黒板に全てを掲示したところ、その数の多さに対して、学習者自身が驚く様子を確認できた。

付箋による漢字掲示（一部）

先にも述べた通り本実践は、個別の漢字を学習するだけではなく、国語辞典と漢和辞典を活用し、語彙数を増やしていくことに主眼を置いた。したがって、語彙を獲得するための「復習プリント」、獲得した語彙を使用して例文を作る「活用プリント」、活用プリントの例文をテスト化する「確認テスト」の 3 種の役割をそれぞれ理解し、学習者自身が学習を進めることが肝要である。結果として、学習者自身はその学習法を理解し、家庭学習にこの方法を生かして継続的に学習を進めることができた。自分の漢字学習法を確立できたことも成果の 1 つとして挙げられるであろう。具体的な家庭学習の経過については、次節で詳述を行う。

(2) 授業実践後の継続的な取り組み

(1) で概要を示した授業実践後も、継続して上記の取り組みを進めた。具体的には、家庭学習で「復習プリント」「活用プリント」を完成させ毎朝提出、指導者のチェックを受けた後、「確認テスト」を作成し、国語科の授業において毎時間テストを実施する。このような流れで年間を通して継続的な漢字学習を展開することができた。



学習者による自作の漢字テスト

年度末までに作成した「確認テスト」は193枚、すなわち最初の授業実践で付箋に書いた漢字に関わる学習を全て完了することができた。実際に年間の授業実践を通して実施できたのは、第175回までであり、全てをやりきることはできなかったが、1年間の学習量としては相当のものと言えるであろう。学習者の継続的な努力に敬意を表したい。

4．学習者の変容

(1) 数値データから

先にも述べた通り、平成27年度末の時点において作成できた漢字テストは193枚であるが、その中で学習者が使用した学年別漢字配当表に掲載されている漢字は628字である。900字を適切に使い分けることを「標準」の漢字力とすると、使用率は約69.8％であり、また第175回までの漢字テスト正答率は83.5％であった。この結果から考えると、「標準」の漢字力が平成27年度の取り組みを通して学習者に身についたとは残念ながら言うことができない。

一方で、同年度当初の漢字習得率は上述に示した「標準」の約20％であり、1年間の取り組みを通して飛躍的な習得率の向上が認められた。また、作成した漢字テストにおいて使用した語彙数は2002語（延べ数）となっており、その中には、これまで使用したことの無い語彙も相当数含まれている。すなわち、理解語彙の増加を図るという意味においても本実践で取り上げた漢字学習の方法は有効性が高いと言えるのではないだろうか。

(2) 学習者自身の認識－振り返りを通して－

本授業実践は、校内研究「望ましい自分を創造できる児童生徒の育成」の一環として行ったものである。この研究過程において行った各学期の研究授業終了後に、学習者が書いた以下の振り返りの記述からも、学習者の変容が捉えられる。特に本報告の主題である「漢字運用能力」という視点から観察すると、正確に書くことのできる漢字、語彙の量が増えたことを確認できる。

① 1学期研究授業終了後（6月）

自分で漢字がにがてと小学校でずっと思っていましたが本当は自分で思ってるより書くことができます。

自分で文章を読んで覚えている漢字まだ習っていない漢が書くこうの間違いができることもわかりました。

（注：誤字・脱字等は原文のまま掲載してある。）

② 2学期研究授業終了後（10月）

国語では教科書の作品や説明文を音読したりしました。読めなかった漢字もありますが、1学期と比べると差は見られます。また、作品紹介文を作りました。私が2学期で身についた力は、単語や漢字を書く力や内容を正確に読む力、また文章をわかりやすく書く力などです。3学期でもこの力をもっとのばしたいです。

③ 3学期研究授業終了後（1月）

私は、漢字や単語を書くこと、読むことがあまりできていませんでした。文章を読む時はいつもひっかかっていました。漢字で書くのも苦手で、ひらがなで書いたり、まちがって書いたりすることが多かったです。また文章を読み取るやり方もわからなかったので、困っていました。なので、私が国語の学習で克服し

なければならなかった課題は、漢字や単語を正確に書くこと、読むこと、内容を正確に読み取ることそれから分かりやすく書くことでした。

いろいろな学習を行いました。まず、漢字や単語を正確に書くために、漢字テストを自分で作り、解きました。漢字や単語を読むことについては、教科書の作品を全部音読しました。内容を読み取ることについては、問題をたくさん解いたり、内容を要約して、紹介したりしました。分かりやすく書くことについては、流れをたいせつにしました。

私ができるようになったことは、分かりやすく書くことです。書き言葉をうまく使いながら作文を書くようになりました。また漢字や単語を書くことのまちがいも少なくなり、読めない漢字も減りました。文章を読み取ることもできるようになったので、できることが多くなったと感じます。

５．授業実践の成果と課題

４（1)、(2）において述べた通り、実際の数値データによる客観的な面と、学習者本人の振り返りによる主観的な面の両面から具体的な成果を示すことができた。特に、「本当は自分で思っているよりも書くことができる」という意識の変化が生じたことは、これからの学習にもつながる非常に大きな変化であったと捉えている。

また、国語辞典と漢和辞典の日常的な活用は、学習者の漢字運用能力の向上を図る上で有効であった。それは学習者が書いた３学期研究授業終了後の振り返りにおいて、使用できる語彙が格段に増え、漢字の書き間違いも非常に少なくなっていることから認められる。日本語に触れる機会が少ない海外だからこそ、語彙と漢字を結び付け正確な運用を図る上で、辞典の活用とその習熟は必要不可欠であると考える。

以上のことから、本実践において行った３点の指導法の工夫は、「標準」の漢字運用能力の習得を目指す上で有効であると結論づける。一方で、学年別漢字配当表に示される漢字900字の確実な習得については課題が残っており、習得率の向上は見られたものの、先に述べた通り「標準」の漢字運用能力は学習者にまだ身についてない。今後も継続的に自作の漢字テストに取り組むとともに、これまで使用していない学年別漢字配当表の漢字を意図的に使用するなど、活動の工夫が必要であろう。今後も引き続き同様の取り組みを続け、学習者がより漢字の運用力を伸長させることを、切に願うばかりである。